

2022年9月18日 青戸教会「熱心さの質的な転換」高橋克樹牧師
列王記上21章1〜16節、ガラテヤ1章1〜10節

回心以前のパウロはキリスト教の迫害者であり、回心以後はキリスト教の伝道者であったというのが一般的な理解だと思います。彼の回心はコペルニクスの転換を一度も回心とは言っていない。パウロの回心といふほど単純ではありません。パウロ自身はこの転換を一度も回心とは言っていない。パウロの回心といわれる出来事は使徒言行録では9章のほかに22章と26章に出てきます。しかし、使徒言行録は福音書記者ルカが書いたものですから、パウロ自身が直接に自分の回心体験を書いたものではありません。そこでパウロが直接書いたガラテヤ書1章11〜24節をみてみたいと思います。彼は自分の回心の出来事を12節にあるように、イエス・キリストの啓示によるものだと言っています。

回心前のパウロが初めて新約聖書に登場するのは、使徒言行録7章58節です。ヘレニストのキリスト教徒であるステファノがエルサレム議会に引き出されて行った宣教演説の中で、神に対するユダヤ教徒の叛逆の歴史を語ったために、それに激高したユダヤ人の民衆が彼を市外に引き出してリンチ（私刑）を加えた殉教の場面です。ステファノはギリシア語を話すユダヤ人でキリスト教徒になった人物ですが、そのステファノが石打ちの刑に処せられている際に、「証人たちは、自分の着ている物をサウロという若者の足元に置いた」とあります。このサウロがパウロです。使徒言行録8章1〜3節によると、その場に彼が居合わせていた理由は「サウロはステファノの殺害に賛成していた」からであり、「家々に押し入って、男や女を問わず引きずり出し、次々に獄に渡して、教会を荒らし回っていた」（3節）のでした。パウロはこれらのことを振り返って、フィリピ書の3章5〜6節で次のように言っています。「わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非の打ちどころのない者でした」と。律法と律法を中核とする先祖伝来の宗教であるユダヤ教にこだわりの、それを純粹に守り通そうとする熱意が、当時ユダヤ教の異端分子と思われるいたキリスト教徒たちを迫害することへと彼を駆り立てたのでした。この熱心さを支えたのは、彼の熱烈なユダヤ人としての自意識と誇りでした。

彼がベニヤミン族の出身だというのは、旧約聖書の土地取得伝説によると、エルサレムとその神殿はベニヤミン族に割り当てられた土地に属しており、バビロン捕囚後はユダ族と共にイスラエル民族を形成するうえで中核となっていた氏族です。ベニヤミン族の出身という言い方は、わかりやすく言えば「東京は神田の生まれよ」と自慢するのに似た感覚です。生粋にユダヤ人だという意味なのです。また、「ヘブライ人の中のヘブライ人」という表現も純粹な血統を強調するものですが、そこにはギリシア語を母国語とするディアスポラのユダヤ人である彼の屈折したユダヤ人意識が潜んでいるように思われます。パウロは使徒言行録9章で復活のイエスに出会ったとき、「サウル、サウル、なぜ、私を迫害するのか」と言われたと言っていますが、このヘブライ語であるサウルと名前はベニヤミン族出身でイスラエルの初代の王であるサウル王に倣って命名された名前であります。おそらく、彼のユダヤ人としての自意識は家族譲りのものであって、タルソスという非ユダヤ人の都市の生まれという「負の事実」によって、彼はユダヤ的な者への強いこだわりを持って育ったのだと思われれます。

なぜ回心前のパウロが、これほどまでに律法に対する熱心さを身に付けたのか。哲学者のフィロンによればヘレニズム時代にはすべてのユダヤ人に律法を教えようとする運動が起こり、ユダヤ人の少年たちは物心がつくると律法を徹底的に学びかつ記憶し、律法を心に刻みつけたといえます。フィロンは「人間はすべて熱心に自分たち自身の慣習や法を守ろうとするものだが、他のどんな国民にもまさってユダヤ国民はそうであった」と言っています。このように幼児期にイスラエルの宗教教育をほどこす理由は、当時のギリシア・ローマ文化の影響を恐れたからです。パウロも幼児期の6歳ころからモーセ五書を習い始め、10歳では口伝律法であったファリサイ的伝承も学習し、13歳を超えてからはバル・ミツバ（戒めの子）となって、完全に律法に従う誓約をする人物になっただろうと思われれます。おそらく旧約聖書の律法は全部暗記していたと思われれます。

そして、パウロはいっしょか自分も律法の教師になろうとして、タルソスからエルサレムに一人送り出されて留学をして、高名なラビ・ガマリエル一世のもとで薫陶を受けたようです。使徒言行録22

章3節では「エルサレムで育ち、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しい薫陶を受けた」とありますし、同23章6節では「生まれながらのフアリサイ派」≡フアリサイ派の息子とまで自分自身のことを語っている通りです。

つまり、パウロは自分の人格形成をエルサレムで律法を徹底的に学ぶことにおいて為したのです。教育のために両親のもとを離れ、エルサレムで教育を受けることは珍しいことではなく、そのような学生が親にお金を無心する様子を記したパピルスも残っています。こうして彼はフアリサイ派に属する若者として青年時代を過ごしたのです。だから、パウロは律法の義については非の打ちどころのない者であったと公言することができたのです。

さて、そのような律法主義に忠実なパウロにとって回心とは何であつたのか。まず、重要な点は彼自身が回心の出来事を語る際に、彼の神学思想の中核である「信仰義認」を用いていない点が注目されます。律法遵守と対立した信仰義認という概念を用いるのではなく、回心においては神の一方的なイニシアティブが強調されている点が注目されます。

使徒言行録9章27節によると、パウロはダマスコ途上で主との出会つたとあります。この「主との出会い」の原文は直訳すると「道で主を見た」となっています。これはパウロ自身においても同じで、Iコリント9章1節では道の意味するギリシア語ホラオーを用いて主イエスを「見た」とパウロ自身が言っていますし、Iコリント15章8節では「そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現われた」と言っています。ここでは「現れた」と訳されていますが、原文では「見た」となっています。このように再三にわたつて主イエスを「見た」という出来事が回心の出来事とされており、これは肉眼で見たということではなく、心の中で起こつた実存的な認識の転換のことを指している表現だといえます。

旧約聖書に登場する預言者の召命記事でも多くの場合、主なる神を「見た」となっています。イザヤ6章やエゼキエル1章にあります。これらも幻視体験をしたということではありません。自分の内面で認識の転換が劇的に起こつたことを指して、神を見たと表現しているのです。ガラテヤ書1章12節によると、「わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によつて知らされたのです」と言っています。この「啓示」の原語は「黙示」とも訳すことができるアポカリュプシスという言葉で、終末の時に神の計画が特定の人に明かされるという意味です。パウロの回心の出来事で彼に啓示された内容は、律法を守るという自分の努力によつて自分を立てようとする義という生き方とは対極にある「信仰による義」のことではありません。復活したイエスとの出会いによつて引き起こされた古い生き方の根本的な一大転換のことであり、キリストによつて新しく造り変えられた自分との出会いのことです。

パウロはなぜこれほど沢山の手紙を書き残したのか。それは彼が教えた福音が常に物議をかもしだし、批判や疑問、問い合わせが教会の内部からも教会の外部からも彼の元に寄せられ、それに対してパウロは彼の性格上それらの批判を黙って見過ごすことができずに、激しくそれらに応戦したからです。パウロが復活の主イエスに幻の中で出会つたことが彼をして回心へと導いたのですが、注目すべきことは、復活の主の顕現が、すべて人間の側からは「見た」という体験として語られているということです。たとえばIコリント15章5節でも、パウロが主イエスとの出会いを「復活のキリストが」現れた」となっていますが、原文の直訳は「見られた」となっています。この「見られる」という体験は、自分自身を深く内省したということです。主イエスが十字架へ向かつていく生き方に直面させられ、それまでの自分に執着する生き方が相対化されて、キリストによつて自分に執着する生き方から解放されて、新しい自分に出会わされたことを「見られた」と言っているのです。自分が救われるために、十字架に架けられて死んだイエスを信じることはある意味矛盾することです。パウロと同じように、復活のイエスに出会うことで、自分に執着する生き方が相対化されるという、自分に執着している熱心さにおいて、質的な転換が起こつた時、私たちは復活したキリストに出会うのです。パウロと同じように、私たちもまた自分自身に執着する生き方から解放されて本当の意味で自分に向きあうことができた時、福音に生かされた人生を歩み始めるスタート地点に立つことができるのです。